

コソボ問題とトルコ

設 樂 國 廣

本号は、一九九八年の五月に急逝された立教大学文学部史学科教授森弘之先生の追悼号である。現在、海外研究の機会を与えられてアンカラに滞在している。森先生はトルコに行ったら、イスタンブルでも案内してもらいたいと常々言われていた。その機会が無かったことは残念なことである。

国際問題化したバルカンのコソボ問題について

ユーゴスラヴィアのコソボは、アルバニア人に対するミロシェヴィッチ大統領の民族浄化政策強行でヨーロッパの大きな問題となり、NATO軍の空爆、そして地上部隊の進駐が行われた。ヨーロッパ・アメリカがミロシェヴィッチ大統領のセルビア人第一主義に対する人権問題として介入したコソボ問題は、NATOの一員として空爆を援護し、地上軍を送り込んだトルコにとっては、別の大きな関心事でもある。

セルビア人の重要地とされるコソボは、一二世紀半ばビザンス帝国から領土を獲得して建国し、一二〇四年の第四回十字軍のコンスタンティノブル占領にともないコソボ全土を支配下に入れた中世セルビア王

コンボ問題とトルコ（設樂）

国の地であつた。コンボでは支配層のセルビア人は少数派であり大部分の居住民はアルバニア人などであつた。

一三八九年オスマン朝のスルタン、ムラド一世は、コンボの戦いでセルビア軍を破り、中世セルビア王国は滅亡した。ムラド一世はこの戦い直後セルビア人によって暗殺された。彼の廟はコンボにある。一四四四年ヨーロッパのキリスト教諸国は、対オスマン十字軍を結成し、若いスルタン、メフメト二世（彼は後に、一四五三年にコンスタンティノブルを征服した）を攻撃し、バルカン半島を南下した。急遽、父親のムラド二世が復位し、第二次コンボの戦いで、激戦の末十字軍を撃破した。

古代ギリシア人と同時期にバルカン半島に入ってきたイリリア人の後裔とされるアルバニア人は広い地域に居住していた。キリスト教徒であつた彼等はカトリックとオーソドックスの間にあつたため、オスマンの支配が続くと、多くがイスラム教を受容していった。（マザー・テレサはコンボ出身のカトリック教徒アルバニア人である）

一九世紀後半、バルカン各地に民族運動が開始されると、キリスト教徒保護の名目でヨーロッパ列強の干渉が始まつた。一八七八年、セルビア、ルーマニア、モンテネグロが正式に独立した。二〇世紀になるとマケドニア問題が起き、列強の干渉が続いた。

一九一二年に始まつたバルカン戦争により、オスマン軍はコンボから撤退した。コンボはセルビアの支配するところとなり、バルカン半島のオスマン帝国領はわずかととなり、アルバニアも独立した。

「トルコ軍八七年たつて、コソボへ」「トルコ軍、一九一二年第一次バルカン戦争で失つたコソボで、今までなかつた歓迎を受けた。」一九九九年七月五日の新聞の見出し記事である。トルコ軍は、NATO軍の一員として、コソボのプリゼレンに近いドラガス周辺を担当する。地域内には、トルコ人が住んでいるマムシュ村もある。NATO軍の多くがキリスト教徒で編成されているため、アルバニア人からは複雑な対応を受けていたが、トルコ軍約九〇〇人編成の部隊は、バルカン出身家族の子弟によって編成され、セルビア語、アルバニア語を話せる兵士が選抜された。進駐トルコ軍はお祭り騒ぎでアルバニア人やトルコ人の歓迎を受けた。

しかし、トルコ軍のコソボ派遣にあつて、さまざまな問題があつた。バルカン諸国はオスマン帝国から民族自立を主張して独立したため、トルコ軍の国内通過は歓迎できないものであつた。ギリシアはキプロス問題で現在も軍事的に対立状態にあるため、トルコ軍の国内通過は全く認められなかつた。ブルガリアは、アメリカの工作で、国会の承認、大統領の了承、官報での公示後、トルコ軍の国内通過を認めた。戦車五両を含む四〇両ばかりの先遣隊が、一日でブルガリア国内を通過した。残りの機材は鉄道でブルガリアに入り、マケドニア国境で陸路に変えてマケドニア経由でコソボ入りをした。ブルガリア通過が認められない場合は、海路アルバニア経由で派遣される予定であつた。しかし、アルバニアからコソボへの道路事情は劣悪であることから、避けたい事情があつた。

オスマン帝国時代にはアルバニア人は大宰相はじめ政府高官を多数輩出している。エジプトの太守ハマドリアリはアルバニア出身であり、オスマン朝のスルタン警備の兵士もアルバニア人が選ばれた。イス

コソボ問題とトルコ（設楽）

タンブルなどにアルバニア人が多く移住した。また、オスマン時代にバルカン半島各地にアナトリアからのトルコ人移住者があつた。コソボには、中部アナトリアのトカトからの移住者が多いといわれる。このため、コソボははじめバルカン各地ではトルコ語を話す人が少なくない。

コソボ問題が拡大して大量にイスラム教徒難民が発生すると、トルコ政府は直ちに受け入れを発表し、難民キャンプを開設した。しかし、到着する難民の多くはキャンプに長くとどまらず、親戚知人を頼って国内各地に移動し、キャンプに留まる数は減少していった。

現在のコソボは、帰還した者を含めてアルバニア人が在住のセルビア人と対立している。また、セルビア人に協力してアルバニア人を弾圧したとして、ジプシー（ロマ）への襲撃もあつた。最近アルバニア人のあいだにコソボをアルバニア人国家の方向へ向けるため、アルバニア語を公用語化し、他の言語を禁止する主張も出てきている。トルコ人始め多くの民族の混住しているコソボが、チトーの指導したユーゴスラヴィアが民族、言語、宗教などの自由を保障していた状態に還ることなく、現在のユーゴスラヴィアと同じになってしまう危険性をはらんでいる。

トルコにとってコソボ問題は、単なる国際問題ではなく身近な重要問題でもある。日本にとっては遠い国の話のようであるが……。

（本学教授）